

ミカサ

(大分市)



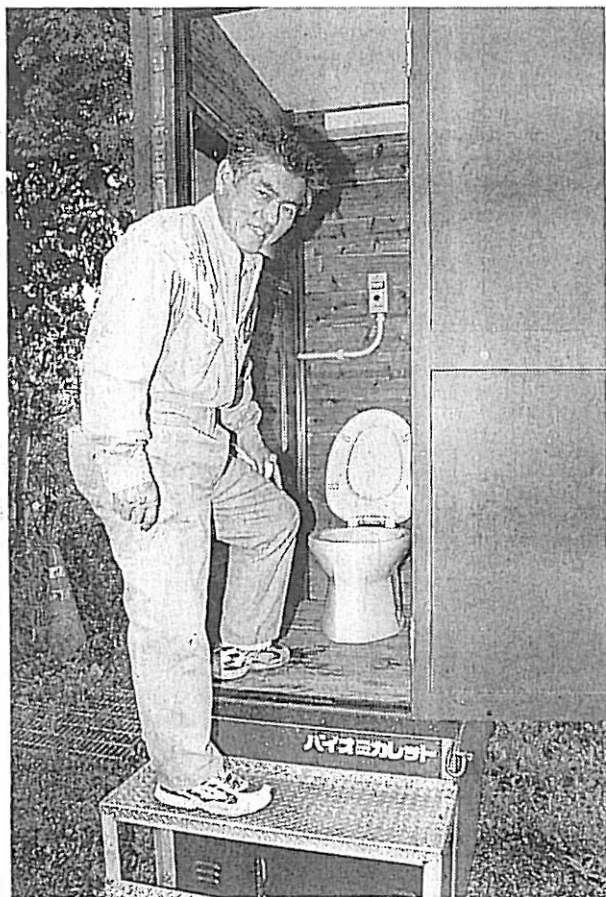
し尿をその場で処理する「自己完結型トイレ」の開発に打ち込む。し尿を燃やす「ミカレット」は南極や富士山でも採用されている。従業員7人を率いる三笠高志社長(57)は「オリジナルの商品を世に出す開発型の会社」と胸を張る。

ミカレットには、日本をきれいにしようという「美化列島」の意味を込めている。昨年2月には、し尿を微生物が分解する「バイオミカレット」を開発した。今年1月にはバイオと土壌処理を併用させた「ハイブリッドミカレット」を完成させ、建設現場に販売したり、貸し出したりしている。

前身の「みどりの商店」は、建設現場用の備品や倉庫、トイレ

バイオで分解トイレ開発

改良重ね南極・富士山へ



昨年完成した「バイオミカレット」を紹介する三笠社長＝大分市内で

の販売・リースを営んでいた。89年に株式会社化して現在の社名にし、建設現場で苦情を見聞きしていたトイレの自社製品を作ろうと開発を始めた。

「し尿2千回分が茶わん1杯分の灰に」。そんなキャッチコピーで94年に販売を始めたトイレは、一気に30台がさばけた。好調な滑り出したが、納入先から「聞いていたのと機能が違う」と苦情が相次ぎ、2年後に

はすべて返品された。温暖な九州とは違い、寒冷地では内部の装置がうまく機能しなくなったのが原因だった。

「あそこで立ち直れなかったら、倒産か夜逃げだったでしょうね」。奮起して改良を重ね、

97年に南極、01年には富士山に納品し、経営を軌道に乗せた。昨年からは、東京の携帯電話のソフトウエア会社で働いていた長男大志さん(26)が営業担当として加わった。「まだ顕著ではないが、そのうち効果が出る

はず」と三笠社長は期待する。妻の八重子さん(58)は大分市高城西町の会社事務所横で蜂蜜や無農薬野菜などの販売を始め、徐々に客がつきだしたという。

ただ「やはりトイレがうちの柱」と三笠社長。今後は、太陽光や風力など自然エネルギーで電力を得るタイプの開発を目指す。「発展途上国を中心に海外戦略も視野に入れながら、多くの人に好まれる商品を作りたい」(成沢解語)